

「おたく」の概念分析

——雑誌における「おたく」の使用の初期事例に着目して——

團 康晃

「おたく」カテゴリーは80年代に作られ、現代日本において特定の人びとに対して用いられるものとして広く知られている。本論は「おたく」をある集団としてその歴史の変遷を描くのではなく、そのような「おたく」カテゴリーの登場による人びとの活動の可能性の変化、さらには人びとの活動の中でのカテゴリーの変化といった相互作用を概念分析の立場から記述した。そこでは「おたく」カテゴリー登場以前のファン雑誌における投稿ハガキ(3節)、「おたく」カテゴリーの登場としての中森のテキスト(4節)、そして「おたく」カテゴリーが広く知られることになった契機であるM事件報道(5節)を対象に分析を行い、ファン雑誌において他者を分類するものとして生まれた「おたく」カテゴリーが、M事件における批判の中で「私たち」を分類するものへと変化し、後に「おたく」をポジティブなものとして研究するための可能性を開いていく過程の一端を明らかにした。

1 はじめに

「おたく」は現代日本において多くの人びとに知られているカテゴリーの一つであり、90年代以降、多くの批評家や研究者が現代社会的なトピックとして言及し、その歴史についての研究も蓄積がなされてきた(宮台[1994]2006; 大塚2004など)。そして、その多くが、83年を起源とし、「おたく」集団の特徴とその変遷について論じている。

本論は、これまでの研究でなされてきた「おたく」集団の歴史について記述するタイプの歴史研究とは異なる立場から、「おたく」という分類をめぐる人びとの活動を見ていくことになる。この着眼点の違いは次節で詳述するが、主眼にあるのは、「おたく」カテゴリーの問題は、歴史を記述する者の問題ではなく、まさに時代

時代に生きる人びとにとっての問題であるという点だ。

私たちは「おたく」というカテゴリーを持たない時に、誰かを「おたく」として分類することはできない。研究者は重要な研究トピックとしてその集団を措定することができない。さらにこの事実は調査者にとっての対象の同定の問題だけでなく、人びとの活動にとっても極めて重要だといえる。この点については、近年蓄積されている「おたく」を対象とする研究の事例においても示唆されている。例えば、宮崎(1998)は教室にいるある人びとに「おたく」というカテゴリーを適用することで分析を進めながらも、その適用の適切性判断の難しさ、「おたく」かどうかの線引きの難しさについて論じている。また、七邊(2005)は、同人誌即売会へ参加する人々を「おたく」と同定しようと

しても、参加者自身にインタビューしてみると「おたく」であることを自認していない者がいるという事実を指摘し、集団と文化の関係について議論を展開している。また、金田（2007）は「同人」であることを隠すという女性の同人の在り方を紹介し、彼女らが同人活動や関連する情報誌においてその規範を身につけることを指摘している。

このような事例に見られる活動が、「おたく」カテゴリについての知識によって可能となっていることに注意したい。つまり、七邊のフィールドにいる人びとは同人イベントに出ることと「おたく」であることの区別ができるからこそ「おたく」ではないと答えることができ、金田の紹介する事例は同人をしていること、オタクであることを他人に知られることが如何なることなのかということを実験者が理解しているからこそ、隠すのだ。このように「おたく」やそれに関連するカテゴリについての知識の下、人びとの様々な活動は可能になっているのである。

このような本論の立場は、「おたく」カテゴリの歴史に関する先行研究に対しても、異なる立場からの知見を提示することができる。考える。「おたく」カテゴリに着目した歴史研究として、松谷（2008）は詳細な資料を用いた研究を行っており、本論で扱う資料の範囲も重なるところが大きい。だが、松谷と本論はその分析方針が異なる。松谷のアプローチは、社会構築主義の代表的な方法論として言説分析を採用しており、ここでは「社会問題」の实在、ここでは〈オタク〉の实在を留保し、言説の相互作用を分析していくと宣言し、〈オタク〉の意味が時期や出来事を通し変化していく過程が詳細に描かれる（松谷 2008: 115）。

本論は、松谷（2008）で検討される資料や

そこで取り扱われる〈オタク〉カテゴリの含意、〈オタク〉イメージについての指摘を否定するものではない。しかし、〈オタク〉の实在を留保し言説のみに着目する時、その言説、テキスト自体が人びとの活動として組織されているという点は見落とされる。

「おたく」についてのテキストが組織される時、先述したように、人びとは「おたく」カテゴリの意味や使用法を知っているからこそ、そのテキストを組織することができる。本論は实在の有無を留保するという手続きではなく、あくまで「おたく」カテゴリのもとに組織されるテキストを対象にし、そこで「おたく」カテゴリの意味や用法を分析することで、「おたく」カテゴリがその時代時代に生きる人びとの様々な活動を可能にし、時にその活動の中で変化していくことに注目したい。このような概念分析と社会構築主義との関係については浦野（2008,2009）を参照されたい。

そういうわけで、本論が分析していくのは、「おたく」という集団ではなく、上で示したような「おたく」カテゴリとそのカテゴリのもとになされる人びとの活動のあり方である。「おたく」というカテゴリがなかった頃、人びとは如何なるカテゴリのもとに活動を行い、また「おたく」という分類が登場した時、人びとの如何なる活動の変化の可能性を得たのか。あるいは人びとの活動は、「おたく」というカテゴリに如何なる影響をもたらしたのか。このような各時期の「おたく」カテゴリの人びとの相互作用のあり方の概念分析を行い、「おたく」カテゴリをめぐる人びとの経験の可能性のあり方の変化を明らかにしていきたい。

以下では、まず2節において本論の研究手法としての概念分析についての解説と調査対象

の確認を行い、3節以降具体的な諸カテゴリーをめぐる人びとの活動の分析を行っていく。具体的には、「おたく」カテゴリー登場以前のファン雑誌における投稿ハガキ(3節)、「おたく」カテゴリーの登場としての中森のテキスト(4節)、そして「おたく」カテゴリーが広く知られることになった契機であるM事件報道(5節)を対象に、そこでのテキストが「おたく」などのカテゴリーのもとに如何なる活動を行い、またそのような活動の中での「おたく」カテゴリーの変化を見ていく。それは、他者を分類するものとして生まれた「おたく」カテゴリーが、「私たち」を分類するものへと変化し、後に「おたく」をポジティブなものとして研究するための可能性を開いた、人びととカテゴリーとの相互作用を明らかにするものである。

2 本論の立場と調査対象

本節では、あるカテゴリーと人びとの活動の関係性を問うていく為の研究の立場と調査対象を整理したい。これまで「おたく」というカテゴリーに注目しつつ、その登場や細分化に着目して歴史を記述してきた研究はあった(村瀬2003,松谷2008)。そして、本論が扱う「おたく」に関する事例の多くも重なるところがあるだろう。しかし、先行研究の多くは現在の「おたく」という集団を指し、或いはあえてその実在を留保し、その表象の変遷を描くというスタイルをとるものがほとんどだったといえる。本論はそのような歴史研究とは異なる概念分析(酒井ほか編2009;Winch1966=1977;Hacking2002=2012)の立場から資料の分析を行うことになる。

つまり、「おたく」という集団や族をめぐる表象の変遷や歴史ではなく、「おたく」という

分類が生じることで、誰かを分類したり、されたりすることが可能になり、さらにそのカテゴリーのもとに如何なる活動が可能になっていくのかという点に注目する。このような分類と人びとの相互作用は、ある種のラベリングのように見えるが、ただあるラベルを誰かに貼ることで、本人がそのラベルを受動的に受け入れるというだけでない。ラベルを貼られたものが、当初行っていたこととは異なる活動を可能にし、さらにはそのような活動の結果、ラベルの意味そのものが変化する可能性をも持つ。このような相互作用の過程を、具体的な人びとの活動から明らかにしていきたい(Hacking2002=2012:230)。

それは、「おたく」という族や集団をめぐる表象の歴史として描く際に見落とされた人びとの経験のあり方の一端を描き出すものとなりうる。そして、このような方針のもとに資料を分析していく際にはエスノメソドロジー、特にSacksが展開していったカテゴリー化の議論(Sacks1979=1987;鶴田2008;前田2009)を参考にしつつ、その資料において人びとが如何なるカテゴリーを用いて、何を行っているのかを具に観察していく。Sacksは、人びとは社会学者が問題とするような人種や階層、本論の場合「おたく」として常にあるのではなく、性別や年齢(子どもや大人などの成長段階)、他にも様々なカテゴリーの集合におけるカテゴリーの下に様々な活動を行っていることを指摘した。つまり、人びとが如何なるカテゴリーのもとに行為を行っているのか、行っていると理解しているのかは、社会学者の問題だけでなく、本人たちにとっても問題であることへの注目を促した。1節で紹介した「おたく」の調査についても、常に本人達が「おたく」でありうるのではなく、むしろ如何なるカテゴリーに分

類されうるのかという問題が当人達にとって重要な問題であることを示唆する事例だった。本論は、そのような様々なカテゴリーを使用する人びとの活動の地平において、「ファン」や「若者」といった様々なカテゴリーがある中で「おたく」というカテゴリーが使用可能になる時、人びとは「おたく」カテゴリーの使用の下に如何なる活動を組織していったのか。更には、「おたく」カテゴリー自体が他のカテゴリーと如何なる関係を持ち、その関係は変化していくのかということをも具体的な当時の資料から見ていく。

次に本論が取り扱う調査対象、諸資料について整理したい。これまでの研究でも「おたく」という語に注目し分析する研究はあったが、その調査対象は資料の代表性の問題等から積極的に制限され選択されてきた。これは一つの重要な方針だといえる。しかし、本論は、資料の代表性の問題ではなく、あくまで各資料となるそのテキストが如何なるカテゴリーの下に組織されているのかをそれぞれ分析することを主眼とする。その為、各節で扱う資料は、3節では1970年代以降の漫画雑誌やアニメのファン向けに出版された雑誌（以下、ファン雑誌とする）、4節では「おたく」カテゴリーの初出とされる『漫画ブリッコ』に掲載された中森明夫の『『おたく』の研究』、5節では週刊誌に掲載されたM事件をめぐるテキストを対象とする。

3節を中心に扱うファン雑誌について幾つか説明をしておく必要がある。80年代前後の「ファン」や「おたく」カテゴリーをめぐる人びとの活動を観察したい場合、様々な手法が考えられる。例えば、インタビューにおいて、当時について語ってもらうということも可能だ。しかし、現在ある知識において当時のことを語ってもらう場合、語られる「過去」が「現

在」における知識のもとに再構成されることがしばしばある。実際、「おたく」はそのような語りをしばしばもたらすものだった（「多重人格」についての事例としては Hacking1995 = 1998: 296）。そこで本論は当時為されたテキストを資料としている。また当時書かれたテキストとしては、「コミケ¹」の同人誌資料もまた重要な資料となるが、アクセスの難しさや文脈の把握の難しさから、イベントカタログの抜粋（コミックマーケット準備会 2005）などを参照するにとどめ、当時出版され、全国で読まれていた漫画雑誌やアニメ雑誌（具体的には『ファンロード』『月刊アウト』）を資料とすることにした。

ファン雑誌を資料とする点は次のような理由だ。多くの「おたく」研究が指摘し、3節以降の分析でも見られるように、「おたく」は「コミケ」のような同人誌イベントや更にその背景となる70年代の漫画ブーム、それに伴う様々に細分化していったマンガ雑誌の創刊ラッシュ、そしてアニメブームといった、コンテンツ文化として展開してきた（米沢 2010 ほか）。その中で、ファン雑誌というフィールドそのものが、「おたく」であることをめぐる実践のなされるフィールドとして際立った特徴を持つようになっていった。その中でもファン雑誌などのテキスト媒体における読者や同じ趣味を持ったファン同士の投稿ハガキを通じたやり取りは、その趣味活動そのものを可能にする情報提供の場として全国的に販売され、読まれた場であり、ファンであることをめぐる活動そのものとなっていた（金田 2007）。特に3節の中心的な分析対象となる『ファンロード』は『月刊アウト』と共に80年代に読者の投稿ハガキを中心に構成されたアニメ雑誌であり、アニメや漫画等様々の「ファン」として投稿ハガキを書

く「読者」によるテキストを数多く観察することができる。このような誌面上での同じ読者とのやり取り、しかもそれが先月号のハガキへの言及も含めなされるやり取りはファン雑誌という媒体の特徴だといえる。このような言及も含めたやり取りは、同人誌のあとがきなどのテキストよりもより明確に、そのテキストが如何なるカテゴリーのもとに組織されているのかを分析することができる。

そして4節では、そのようなフィールドであるファン雑誌において中森の『『おたく』の研究』が組織され、そこで「おたく」カテゴリーが使用されること、さらに5節では4節においてファン雑誌において登場した「おたく」カテゴリーが、想定される読者が「ファン」とは異なる週刊誌という場において用いられる際に如何なる活動が展開され、そこで「おたく」カテゴリーに如何なる変化が起こっているのかをみていく。

3 「おたく」以前のカテゴリーの運用事例 「ロリコン」カテゴリーをめぐる

節では、「おたく」カテゴリーが登場する以前に、ファン雑誌に見られる投稿ハガキなどのテキストが如何なるカテゴリーのもとに組織されているのか、当時のカテゴリーの使用法や意味に注目し、そのカテゴリーの理解に基づくテキストを通じた活動や、カテゴリーの変化に基づく活動の変化を見ていく。

3-1 他者としての「ロリコン」、自己としての「ロリコン」

多くのおたく研究においても繰り返し指摘されているように（コミックマーケット準備会2005）、70年代以降、漫画ブームやアニメブー

ム、さらにコミケといった同人誌文化の展開への世間の注目の中、そのファンの存在は広く知られるようになっていた。松谷（2008: 117-118）が指摘するように、当時、そのような人びとに「おたく」というカテゴリーが用いられることはなく²、「ガリ勉」や「ネクラ」といったカテゴリーが用いられていた。また、このようなカテゴリーが流行語となり、アニメやプラモデルに耽溺するキャラクターが作品内で描かれるようになっている。松谷はこのような状況を「個々人の人格や特性、趣味志向性などへのネガティブな注目は、若者たちのコミュニケーションにおいて前景化し」た状況だと説明している（松谷2008: 118）。

例えば『non・no』（1982.3.20. pp59-63）には「男性研究 男の心に潜むロリータ願望症」という記事が掲載され、『朝日新聞』（1982.12.22. 朝刊. pp17）の「ヤング'82 流行語」という記事では、「ロリコンのネクラ族 もうほとんどビョーキ」といった当時の若者の流行語として紹介されている。ここで用いられている「ガリ勉」や「ネクラ」「ロリコン」といったカテゴリーが、この記述を行う当人（記者など）に適用されたものではなく、他者を記述する為のカテゴリーとして用いられている点に注意したい。松谷が指摘した諸カテゴリーの多くは、特定の人びとをそうでない人たちが他者として記述する際に使用されている（ここでは、「彼ら（「ネクラ」など）／私たち（読者・記者など）」）。そしてある他者をこのようなカテゴリーのもとに記述することで、「ネガティブな注目はなされているのだ。では逆に、ファン雑誌上で特定の人びとは、このようなカテゴリーを如何なるものとして理解していたのか。あるいは自らを如何なるカテゴリーで記述していたのか。

前節で解説した投稿ハガキを中心に構成されている『月刊アウト』と『ファンロード』に注目した³。まず、その誌面上において最も際立った自己へ適用されるカテゴリーは「ファン」や「●●ファン」というカテゴリーである。例えば『月刊アウト』(1978.2.10)の投稿ハガキには、「ルパンとデビルマンファンの高1の私」(pp84)、4月号には「SFファン」「アニメファン」(pp98)といったカテゴリーの自己への適用が見られる。そして、投稿ハガキにおいて、自らを「ルパンとデビルマンファン」と記述することは、投稿者が何者なのか、何が好きなファンであるのかを示すことであり、そこで読者は投稿者が何者であるのかを理解することができる。そしてこのような自己を何かの「ファン」として記述することは、例えばある特定のファンへの文通の誘いをしたり、同人誌の交換を依頼したりするといったファン文化を可能にしている。そして、こういったテキストによって誌面が構成されることで「ファン雑誌」は「ファン雑誌」としての特徴を成り立たせていた。

このようなファン雑誌における様々なカテゴリーの自己適用の中で、「ロリコン」カテゴリーをめぐる幾つかの事例に注目したい。先述したとおり「ロリコン」等のカテゴリーは新聞などである他者への「ネガティブな注目」を可能にしていた。しかし、ファン雑誌においては、同じ語が異なるカテゴリーとして使用されていたのである。その中でも『ファンロード』における幾つかの投稿ハガキのやり取りに着目し、分析を行いたい。創刊間もなかった『ファンロード』の「エンサイクロペディア・ファンタニカ」という「アニメファン」である「読者」がアニメなどの用語について解説するというコーナーでの投稿ハガキだ。そこには吾妻ひでお風のイラストの傍に次のような説明がなされている。

引用①(『ファンロード』1981.3.25. pp85)

ロリコン

人類全体が変わるべき理想の型(タイプ)、ニュータイプ、一般人(凡人)とは秘術女子高生あるいは秘術女子学生により容易に判別可能である。あじましてお

ここで引用された「ロリコン」についての解説が如何なる活動であるのかを理解するために、『ファンロード』という場、その枠組みに注意したい。『ファンロード』は、アニメに関する情報や読者の投稿ハガキから構成される雑誌であり、その読者の想定としてアニメの「ファン」であることが期待されている。そこで投稿者は「ロリコン」について、新聞などで紹介された他者に向けられたネガティブなカテゴリーとしてではなく、「人類全体が変わるべき理想の型(タイプ)」だと説明する。さらに、「ニュータイプ」というアニメ作品「機動戦士ガンダム」において用いられる人称カテゴリーと結び付いたものとして、また「一般人(凡人)」とは異なるものとして説明するのだ。この解説は、いわば一般的な「ロリコン」カテゴリーの理解、つまり他者に適用するネガティブなカテゴリーという意味を、『ファンロード』の想定された読者(「アニメファン」)に理解可能な語彙を用いて逆転させている。つまり、「ロリコン」を「理想の型」、「一般人」を「凡人」として描き出すことである種のジョークにしている。Sacks(1974)が指摘するように、何かのジョークに笑うことができることは、笑うべきことの理解によって可能になっている。ある会話において特定のジョークに笑うことができることは、同じ理解を持つ者としてあることを達成する一つの手段となっていた。この『ファンロード』に

おける投稿ハガキはそのような知識を資源とすることでその面白さを理解できる。そしてこの投稿ハガキの面白さを理解することは、「アニメファン」として「読者」たることに他ならないのだ。このような「ロリコン」カテゴリーの意味とその使用は先に見た新聞や雑誌上での使用とは明らかに異なることがわかる。

このような新聞などのマスメディアにおいてネガティブな意味合いとして用いられるカテゴリーが、ファン雑誌やアニメ雑誌、さらにはコミケのカタログにおいて、ジョークとして、あるいは自己の嗜好を示すカテゴリーとして使用される事例は「ロリコン」に限られるものではなかった。例えば、同性愛的な内容を描く同人誌に対して「ビョーキ」カテゴリーを用いる等も見られるものだった（例えば『コミケットカタログ 21』1982.08.08. pp6）。

3-2 発見された「ショタコン」カテゴリー嗜好の細分化

さらに『ファンロード』において注目すべき現象は、このようなカテゴリー使用を通じた投稿の中で、読者によって様々なカテゴリーが発明されていった点にある。引用①から二か月後の1981年5月の読者からの質問コーナーでは次のような質問がある。

引用②（『ファンロード』1981.5.25. pp74）

Q 男の人が小さな女の子を好きなのをロリコンとっている意味はわかるのですが、それじゃあ、女の子の人が小さな男の子を好きなのはなんというのでしょうか…。(練馬区 幡井祐子)

A 同じ言葉で総称してもいいはずですが。そもそもロリコンは、ロリータという女の子を好きになったことからきた名称ですが、正太

郎クンを好きになったショタコンとかいうのは、なんとなくゴロが悪いではありませんか。

この質問は、「ロリコン」という嗜好の分類となるカテゴリーの用法を確認し、その性別が逆転したもの、つまり少年愛好趣味も同じカテゴリーとして使用可能なものなのか尋ねている。この質問に対して、編集者は次のように答えている。少年愛好趣味もまた「ロリコン」でよい「はず」だと。さらにその後、鉄人28号の登場人物である「正太郎」を引用し、「ショタコン」だと「ゴロが悪い」とむしろ、カテゴリーの名称として不適切だと述べている。つまり、悪例として「ショタコン」は例示されていたのである。しかし、二ヶ月後の1981年の7月号には次のようなハガキが投稿されている。

引用③（『ファンロード』1981.7.25. pp95）

第5号 P.74 で正太郎君が好きならショタコンと出ていた。悪いか！

どーせ私はショタコンよ！正太郎君かわいい♡かしくくて素直で弟にしたいわん♡でも正直、あのページを読んだ時は驚いた…。自分のこと言われているみたいで…ううところで最近のエンディング、鉄人ばかりじゃないのオ

そうそう友人の星亜郎どのは「ショーコン」の方がと申しております。(エギリ アイ)

投稿内容を見てみると、まず一文目、二ヶ月前のことを指して「正太郎君が好きならショタコンと出ていた」と主張している。注意しなければならないのは、二ヶ月前に書かれていたことは「正太郎君が好きならショタコン」という主張ではなく、むしろ先の引用でみたように本当は悪例として挙げられていたという点だ。し

かしながら、この投稿ハガキでは「ショタコン」は悪例ではなく、一つの嗜好性に関連するカテゴリーとして、発見されている。そして、「悪いか！どーせ私はショタコンよ！」と悪例として例示された「ショタコン」カテゴリーを、ある種のネガティブなカテゴリーとして引き受けた上で、自らにそのカテゴリーを使用してみせる。そして、自らが「ショタコン」であることを、「正太郎」への思いを綴り、「鉄人 28 号」のエンディングへの愚痴を記すことで示してみせるのだ。

ここで使用された「ショタコン」カテゴリーは、ネガティブなニュアンスを持つものだと理解されながら、自己の記述の為に用いられていることがわかる。

さらに、この語は『ファンロード』誌上で、少年愛好を指すカテゴリーとして、引用③での「ショーコン」にも見られるように、様々な代替案の提案といった議論も含めて、話題になり、流通することになっていった。二カ月後の「イロイロなシュミの人のコーナー」では、次のような投稿ハガキがみられる。

引用④（『ファンロード』1981.9.25, pp94）
ショタコンの皆様へ、
ブラッドベリの本をおすすめいたします。
かなり好きそーな男のコが出て来るんですわ
ん☆
（以下略）（石川県 猫田猫美）

このように少女愛好者を指す「ロリコン」さらに、「ロリコン」の定義をめぐるやり取りから生じた「ショタコン」という語は、ある嗜好を指す語として発見され、投稿者たちはこのカテゴリーによって自分の嗜好を記述するようになっていった。また、この号には、「ケスト

ナー・コンプレックス」や「クラリス・コンプレックス」といった「ロリコン」の下位分類となる他のカテゴリーの提案なども次第に見られるようになる。そして、このようなカテゴリーが読者に理解され、用いられはじめることで、投稿者は読者の中にいる「ロリコン」「ショタコン」という「ファン」よりも詳細で具体的な嗜好を持つ者に向けて、おすすめ作品を紹介し、文通の誘いをし、同人誌の交換をすることができるようになっていく。これまでは明確な名を持たずそれでも広義のアニメファンとして『ファンロード』を読んでいた読者たちは、特定の趣味嗜好を持つ者に用いるべきカテゴリーを発明し、投稿コーナーで提案し、同じ嗜好を持った者たちに呼びかけるようになっていく。そして、読者たちは時に提案されたカテゴリーを自己に適用し、時にさらなる下位分類を作っていた。そして、このような下位分類の流通は1982年1月号の「ショタコン」特集というかたちで誌面構成にも影響を持つようになっていったのである。

ここで見てきた『ファンロード』誌上のやり取りには、カテゴリーの使用をめぐる際立った特徴がある。それは、ファン雑誌において、「ロリコン」などのカテゴリーが「私」や「私たち」の嗜好を記述するために用いられている点だ。引用③に顕著なように、「ショタコン」という語は、ファン雑誌上で自らの嗜好を示す為にファン自身が自らに適用する新しいカテゴリーとして発見され、広く知られるようになっていった。つまり、「私」は「ロリコン」ではなくまさに「ショタコン」というカテゴリーでこそ適切に記述されるものだという発見を伴うものとして、自らにそのカテゴリーを用いることで、ロリコン以上に詳細なジャンルとなる「ショタコン」や「クラリス・コンプレックス」

を持つ読者に向けて文通やサークル活動への参加を誘うことが可能になっているのである。

このような嗜好を記述するためのカテゴリーの細分化は、アニメ作品の増加やアニメキャラクターの増加に伴い更なる細分化を進め、さらには誌面上で自らの嗜好が支持され、特集されることを目的とした投稿も増えていく。このような細分化の過程は、コミックマーケットのカタログの誌面にも見られる現象であった。しかし嗜好と嗜好を持つ人を表現するカテゴリーの細分化の過程の中、中森のテキストで「おたく」が用いられるまで「おたく」カテゴリーが目立って用いられることはなかった。

4 『『おたく』の研究』の分析

本節では、これまでの見てきたファン雑誌上に「おたく」カテゴリーが如何なるものとして登場し、受けとめられていったのか、当時の雑誌テキストを対象に見ていきたい。

『『おたく』の研究』と題された中森のテキストは、大塚英志が編集を務めていたロリコン雑誌『漫画ブリッコ』に掲載されたものである。決してメジャーな雑誌ではなかったが、70年代後半から続くロリコン漫画の路線と同人誌文化の合間にあるような位置づけの雑誌として展開しており（米沢 2010: 275）、そこで中森のテキストは、投稿ハガキではなく、自身が主宰だった「東京おとなクラブ」の出張版コラムとして掲載されている。中森による「おたく」カテゴリーについてのテキストは 1983 年 6 月号から 3 か月間連載した後に打ち切りとなった。また翌年の 6 月号では、投稿欄において編集者の大塚英志から「差別用語」として批判されている。この中森のテキストをめぐる一連のやり取りは、後の「おたく」研究においてその初

発の事例として繰り返し指摘されてきた（村瀬 2003 ほか）。

中森のテキストは、『『おたく』の研究』というそのテキストの題名からもわかるように、投稿ハガキにおける一読者として自らについての記述や「私たち」についての記述ではなく、「おたく」という現象についての「研究」という枠組みのもとで組織されていく。ここでは、この中森のテキストに見られる「おたく」カテゴリーの使用とそこで分類されるもの、その意味に注目し、そのカテゴリーの登場と、反響について確認していく。

4-1 「彼ら」「観察対象」としての「おたく」カテゴリー

前節の「ロリコン」カテゴリーの使用で際立っていた点は、それが「私たち」を記述するために用いられているという点だった。一方、「おたく」カテゴリーは対照的な使用方法を持っていた。中森は『『おたく』の研究』の連載の初回を以下のような文章で始めている。

引用⑤（『漫画ブリッコ』1983.6.1. pp199）

コミケット（略してコミケ）って知ってる？いやぁ僕も昨年、二十三才にして初めて行ったんだけど、驚いたねー。（中略）それで何に驚いたっていうと、とにかく東京中から一万人以上もの少年少女が集まってくるんだけど、その彼らの異様さね。

中森は、報告すべき研究のフィールドとなった「コミケット」を知っているか読者に問いかける。そして、そのイベントに中森は初めて足を運び、そこで研究対象となりうる「おたく」と呼べそうな異様な事態、人々に出会い、驚いたことを報告している。このテキストの組織化

において注意しなければならないのは、前節で見た投稿ハガキの投稿者と中森では、そのテキストを組織する際の書き手の立場が明らかに異なる点だ。引用③④が「私」を記述するために「ショタコン」カテゴリーを用いて、「私たち」「ショタコン」とのやり取りを行っていたのは異なり、中森は自らと「異様な」「少年少女」たちとを同じカテゴリーのもとに記述できるものとはせず、「彼ら」として記述している。中森は「私／彼ら」、「観察者／観察対象」という区別における「彼ら」「観察対象」に適用されるものとして「おたく」カテゴリーを使用しているのだ。そして、三回の連載を通してこのカテゴリーの関係は一貫していた。

前節や本節での諸カテゴリーに基づくテキストの組織を見ていくと、70年代以降急激に発展するファン文化を言説として捉える場合には見られない、人びとの経験のあり方が見えてくる。つまり、「自己」として「ファン」を描くことと、「他者」としての「ファン」を描くこととは、同じ時代の同じ人びとを描くのであってもその内実は大きく異なっている。このような事実は、Sacksが人びとの記述実践についての洞察において指摘していた。Sacksは、ある出来事の当事者として報告することと、傍観者として報告することではその出来事を語る権利や驚く権利の違いが生じることを指摘している(Sacks 1984)。「ロリコン」カテゴリーが、まさに当事者としてそのファン活動を行う為に使用されていたのに対し、「おたく」カテゴリーは中森という「観察者」にとっての「観察対象」として用いられている。

4-2 嗜好と活動形式の分類としての「おたく」カテゴリー

「おたく」というカテゴリーを用いてある

ファンやその活動を記述する際の中森の位置づけを見る中で明らかになったのは、前節で投稿者が「ロリコン」カテゴリーを自らに適用し、「私たち」の嗜好をめぐる活動を可能にしていたのに対し、中森は「おたく」カテゴリーを自らに適用することはなく自らを明示されない「観察者」として「観察対象」の異様な「彼ら」に「おたく」カテゴリーを適用している点だった。また、「おたく」カテゴリーは、このような適用する者／される者の違いだけでない。加えて注目したいのは「おたく」が、「ロリコン」や「ファン」といった嗜好の分類とも異なるカテゴリーだという点だ。

中森は打ち切りにあうまでの三回の連載において、それぞれ「おたく」のエピソードを紹介し、そこで「おたく」の特徴を列挙していた。その中で中森は、「おたく」に出会う場所や状況、そして「おたく」が嗜好の分類ではなく活動の特殊性と嗜好とが結びついたものとして描いている。

中森は「おたく」と遭遇したエピソードの舞台として第一回と第二回に「コミケット」、第三回にはマンガ同人誌の置いてある本屋を挙げている。このような場はいわばある特定の嗜好を持った人が集まる場であることは『漫画ブリッコ』読者にとっても理解できるものだろう。

中森もこの場と「ファン」の関係について十分理解している。中森は「コミケット」という場に集まる「マンガファン」、「SFファン」や「アニメファン」を列挙し、このような人々が「普通、マニアだとか熱狂的なファンだとか、せーぜーがネクラ族」と呼ばれる人たちだとし、それでも「ファン」といった嗜好に基づく分類ではなく、「現象総体を統合する適確な呼び名」として「おたく」を用いているのだ(『漫画ブリッコ』)

コ』.1983.6.1. pp200)。では、「ファン」のような嗜好の分類ではなく「おたく」というカテゴリーを用いる時、そこには何が想定されているのか。

引用⑥（『漫画ブリッコ』.1983.6.1. pp200）

普段はクラスの片隅でさあ、目立たなく暗い目をして、友達の一人もいない、そんな奴らだが、どこからわいてきたんだらうって首をひねるぐらいにゾロゾロゾロゾロー万人！それも普段メチャ暗いぶんだだけ、ここぞとばかりに大ハシャギ。

引用⑥にあるように「おたく」であることは、「コミケット」からわかる嗜好だけでなく、「クラス」における普段の活動との関係性に基づいて分類されている。これは「おたく」カテゴリーが、ある嗜好の分類ではなく、学校において「友達の一人もいない」「目立たなく暗い」といった活動特性と嗜好の分類とが結びつけられたことを示している。さらに第二回では「おたく」という語の由来として「コミケとかアニメ大会とかで友達に「おたくらさあ」なんて呼びかけてるのってキモイと思わない」（『漫画ブリッコ』.1983.7.1. pp172）と読者に問いかけているように、「コミケ」というある嗜好と結びついた場だけが問題なのではなく、そこでの人びとの振る舞いが問題となっているのだ。中森は他にも、「おたく」の特徴として「決定的に男性的能力が欠如している」（同上）、「二次元コンプレックスといおうか、実物の女とは話も出来ない」（同上）、同人誌ショップにおいて「自分達だけしか通じない冗談言いあってドヒャドヒャうちわで大受け」（1983.8.1）している活動の様子を挙げて批判する。つまり、「おたく」カテゴリーが適用される人はある嗜好だけでな

く、振る舞いや活動もまたその分類の為のポイントとなっているのだ。

4-3 「『おたく』の研究」に対する反響 避けられる自己への適用

このような「おたく」カテゴリーの発明、そのテキストは読者にどう読まれたのか。「おたく」カテゴリーは、読者たち「ファン」を他者として、その嗜好と活動の異常性とを結びつけて使用されていた。実際、中森が後に、「当の読者の大半は、そのまま僕が“おたく”の研究”でそう呼んだ「おたく」の人々だったのだろう。いわば、これは一種の読者罵倒とも読める」、「ある意味で挑発したかった」と振り返っているよう（中森 1989:94-95）、ネガティブな、異常性を含意したカテゴリーとして「おたく」カテゴリーは発明されていた。このような後年の回顧以上に重要なのは、実際に当時の投稿において読者が「おたく」カテゴリーをネガティブなカテゴリーとして理解していたということだ。中森の連載の第一回の後、次の号には中森のテキストへの感想ハガキが紹介されている。

引用⑦（『漫画ブリッコ』.1983.7.1. pp201）

（前略）東京おとなクラブ Jr. は2人とも本音で書いているのがよい。悲しいかな、私めは昭和三十年生まれ以降の連中の一人なのであった。それに自分が「おたく」ではないと言い切れないのが辛い。（後略）（山形県 江口繁樹）

引用⑦の読者コーナーへの投稿ハガキの記述を見てみると、読者である江口は、筆者たちと同じ世代であることを述べた後、最後の文で「自分が『おたく』ではないと言い切れないのが辛い」と述べている。まずは『『おたく』ではな

いと言い切れない」という記述であるが、これは「おたく」カテゴリーの理解にもとづくものだ。「おたく」カテゴリーは、「ショタコン」や「ロリコン」のような特定の嗜好についてのカテゴリーではなく、前項で見たように様々な嗜好を包摂するものであった。故に、「ロリコン」雑誌の読者である江口は、自らが「おたく」でないことを言い切れないのだ。さらに注目すべきは、江口が「おたく」であることを否定しようとし、否定することができないことを「辛い」ことだと述べている点だ。引用⑤にあるように、中森は「おたく」を極めてネガティブ（「異様」「暗い」）なものとして特徴づけており、読者もまたこのカテゴリーに対する理解が可能であるが故に、「おたく」ではないと言い切れないのが辛くなるのである。

読者の投稿ハガキからもわかるように、中森の「おたく」カテゴリーが明らかにネガティブなカテゴリーとしてロリコン雑誌読者に適用されていることは、読者自身にも理解され、最終的に三回で連載を打ち切られることになる。そして、翌年の6月号の投稿ハガキのコーナーにおいて、「おたく」カテゴリーが使用された投稿ハガキが掲載されている。

引用⑧（『漫画ブリッコ』1984.6.1. pp190）

最近、マンガ家、編集者のおたく攻撃が泥沼化してきました。最初は健全な批判だったのが、今ではマンガのネタや罵詈雑言のさかなとなっていて非常に不快です。同人誌ファンがエリを正すことも必要ですが、それに水を差すような中傷を繰り返す同人誌の作り手にも問題があります。この問題に取り組んでください。

神奈川県／AHA413

読者であるAHA413は、まず「最近、マンガ家・編集者のおたく攻撃が泥沼化してき」たことを報告し、その後に「同人誌ファンがエリを正すこと」の必要性を認めつつも、同人誌の作り手のあり方を問題化している。ここで注目したいのは、読者が「おたく攻撃」としてマンガ家や編集者の攻撃対象に「おたく」カテゴリーを用いながらも、自らを「おたく」ではなく、「同人誌ファン」として記述している点である。「おたく」が攻撃される対象として描かれる一方、自らを「同人誌ファン」としてカテゴリーを使い分けているのだ。つまり、「おたく」カテゴリーの自己への適用は慎重に避けられている。

この投稿ハガキに対して編集に携わっていた大塚英志は中森の「おたく」カテゴリーについて「これほどあからさまに差別することを目的として作られた〈差別用語〉も珍しい」と言及し、「おたく」への攻撃の打ち切りの経緯を述べた上で相談に応じていた（『漫画ブリッコ』.1984.6.1.）。

以上のように中森の「おたく」カテゴリーは、ネガティブなニュアンスを持つある種の「差別用語」として理解され、その後、3-1の「ロリコン」事例のように「私」や「私たち」を示すカテゴリーとしてファン、読者に積極的に用いられることはなく、ファン雑誌においても異様な他者、批判される第三者を描く際に用いられることになっていく（松谷 2008:119-23; 中森 1989）。

以上の分析を通して、雑誌における「おたく」カテゴリーが「ロリコン」や「ファン」「ショタコン」とは異なる意味や用法を持つカテゴリーとして登場し、そのカテゴリーがそのような特徴を持つ故に、ファン雑誌読者の自己を記述する為のカテゴリーとしての使用が広く展開されることはなかった背景は見えてくる。そし

て、そのカテゴリーがファン雑誌以外で、広く知られることになるのは、1989年のM事件における報道の中でのことだった。

5 M事件報道における「おたく」カテゴリー 「おたく」カテゴリーの変容

「おたく」カテゴリーが中森のテキスト以降、大きく注目されることになったのは、M事件(東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件：警察庁広域重要指定117号事件※名は全てMとした)だった。M事件とは、27歳男性のMによる幼女誘拐殺人事件であり、犯行の特異性から当初からメディアの注目が高く、Mの逮捕後、メディアはこぞってMの周辺情報やMの背景についての報道を行っている。多くの「おたく」に関する研究がM事件によって「おたく」は広く認知されようになったという指摘をしているが、重要な点は広く認知されたという事実だけではなく、この事件報道において「おたく」カテゴリーが用いられ、その中でその使用法や意味が変更されながら広く知られていった点だ。

以下では、M事件の報道における「おたく」カテゴリーの使用が1983年に中森の発明によって可能になっていたという点、そして、この事件報道の中で「おたく」カテゴリーが中森のそれとは異なるものへと変化し、それにもないそのカテゴリーのもとになされる活動の可能性の幅が変わっていった点に注目していく。

5-1 Mを何者として描くのか 犯罪と世代と結びつけた「オタク族」カテゴリー

M事件の報道の中の一つの表現として「おたく」カテゴリーは用いられることになる。しかし注意しなければならないのは、当初から「おたく」カテゴリーのみが注目されていたという

わけではない点だ。

逮捕直後の『週刊朝日』では、「犯罪史に残るような凶行に走らせた心理的な原因はいったい何だったのか」という見出しのもと、「ネクロフィリア(死体性愛)とペドフィリア(幼児性愛)が繋がったのだろう。両方とも性的倒錯の一つだ」(『週刊朝日』1989.8.25. pp28)といった推論がなされている⁴。さらに、続く報道の中でMのホラービデオやロリコン雑誌で埋め尽くされた自室が報道され、被害者の遺体が撮影されたビデオテープが押収されたことで、Mの犯行と「ホラー」や「ロリコン」といった嗜好は結びつけられ、「ホラーマニア」や「ロリコンマニア」をある種の犯罪者予備軍とみるような解釈が登場し、実際に「ホラー」コンテンツの規制要求が起こっていく⁵。

このようなMの犯行の背景を説明する為のカテゴリーの一つとして「オタク族」といったカテゴリーも示されている。9月1日の『週刊ポスト』において、野田正彰はMの部屋について「まさに閉鎖された個室の世界ですね。これはファミコン、パソコン、アニメなどに熱中する少年や“オタク族”などに共通して見られる自閉化された部屋をシンボリックに表しています」と解説している(『週刊ポスト』1989.9.1. pp34)。また、『女性自身』においては、「フェティシズム・ペドフィリア・ネクロフィリア」などについての「事件に登場する用語解説」の一つとして「オタク族」についての解説がなされている。

引用⑨(『女性自身』1989.9.5. pp20)

ファミコンやマンガしか興味を示さない世代。仲間同士で集まっても言葉を交わすこともなく、ひたすらそれに没頭する。仲間を名前で呼ばず「オタク」と呼ぶことから、この

名がついた。

「オタク、あのテープ持ってる？」とはアニメオタクの挨拶語

中森が後に指摘しているが（中森 1989: 93）、「オタク族」という表記は 1983 年の中森のテキストにおいて用いられたものではなく、その後のファン雑誌において用いられた表記である。しかしこのカテゴリーの紹介において注目すべきは、『週刊ポスト』『女性自身』共に「オタク族」を「ファミコン」や「マンガ」「アニメ」といった趣味嗜好の分類と、部屋の様子から推察される「自閉化」、「言葉を交わすこともない」という活動の特性が結びついたものとしてとらえている点だ。これは、1983 年において中森のテキストにおける「おたく」カテゴリーにも見られた特徴であった。また、『女性自身』のテキストにおいては、「仲間を名前と呼べず」という中森のテキストには見られなかった特徴が加えられつつも、中森が 83 年の第 2 回の連載で示した「おたく」と呼び合うというエピソードが紹介されている。さらに、ここでの「オタク族」カテゴリーも中森の「おたく」カテゴリーのように、自己ではなく他者を描く為のカテゴリーとして用いられているのだ。M 事件における M の特徴化の資源として中森の「おたく」カテゴリーは、変更を加えられ使用されている。つまり、中森のテキストにおける「おたく」は「オタク族」という語の変化を経て、このような M の特徴化の一つの資源となっていった。

しかし、ここで「オタク族」カテゴリーの使用可能性が中森によって準備されていたという点だけでなく、この報道の中で「おたく」カテゴリーの内容自体が変化しているという点に注目したい。一つには「オタク族」カテゴリーが M 事件という特異な犯罪の特徴化に用いられ

ることで、そのカテゴリー自体が M 事件という犯罪と結びついていった点が挙げられる。中森のテキストにおいて「おたく」は批判はなされてはいても、犯罪との結びつきが示されることはなかった。しかし、「おたく」「オタク族」カテゴリーは、M 事件の説明に用いられ、「ロリコン」や「ペドフィリア」といった他のカテゴリーと共に犯罪を引き起こしうる人びととしての意味が加えられる。「オタク族」であると説明していた『週刊ポスト』においては、次のような推論が示されている。「M は、年齢的にも、このオタク族の先駆けといったところだろうか。そして翻って考えれば、現在のオタク族の中から第 2 の M が出てくる可能性も十分あるということになる」（『週刊ポスト』1989.9.1. pp34）。

加えて、M 事件の報道の中で「オタク族」が特定の世代、「少年」や読者の「子ども」を指すものとして理解されている点に注目したい。83 年の中森のテキストやそれ以降、『月刊アウト』などのファン雑誌において「おたく」という語が用いられる時、殊更に世代の分類として用いられることはなく、むしろ同じ「ファン」内における逸脱者、他者として描かれる時に用いられている。しかし週刊誌や新聞の報道で用いられる時、引用⑨にあるように、「オタク族」というカテゴリーは 27 歳の M と同世代に見られる異常な特徴として使用されていく。これは報道される媒体に期待される読者の問題ともかかわっている。ファン雑誌の想定される読者は当然ファンであり、ある程度読者の世代も想定可能だ。一方で、週刊誌や新聞といった媒体では、想定される読者は「ファン」ではなく、一般の広い読者となる。このような媒体で「おたく」カテゴリーが使用される時、ファン雑誌では問題とならなかった「世代」の問題に焦点が

あてられた。

M事件の報道における「オタク族」カテゴリーの特徴として、これまではなかった犯罪者予備軍となる世代という意味の拡張について確認したが、このような報道におけるMの特徴化の最も際立った報道形式が、親であり読者である人々が自らの子どもに対して行うMとの類似性についての「チェック判定表」だった。「各家庭でその「異常」の若芽を摘み、二度とこんな事件がおこらないように、というのが私たちのスタンスである。「子供部屋を解剖してじっくり観察を」⁶（『サンデー毎日』1989.9.10. pp29）。このようなチェック表は、明らかに読者として「親」を想定し、その「子」と犯罪との結び付きをチェックするという「親子」の関係の規範のもとに描かれていることがわかる。つまり、週刊誌や新聞といった媒体において、「オタク族」カテゴリーはある種の世代の問題、さらには「親子」の問題としてまで拡張されているのだ。そこには3節で見たような「私たち」としての「ロリコン」や4節で見た「彼ら」「おたく」とは異なる、「親」や「大人」が発見し、なくすべき異常な世代としての「おたく」「少年」が描かれる。これは、Sacks（1979 = 1987）が「若者（ティーンエイジャー）」カテゴリーが「大人」に管理される支配的カテゴリーだと指摘した際の事例と同様なカテゴリーの在り方が生じていることがわかる。

以上見てきたように、「オタク族」は犯罪者予備軍といった意味、そして特定の世代という意味を加えられたカテゴリーとして、そして「親」や「大人」が発見しなくすべき「子」や「若者」の問題として全国紙・週刊誌の中で用いられていく。それは、中森が「おたく」というカテゴリーを発明した頃の内容を拡張するものとなっていた。

5-2 大塚のテキストの組織に見られる「我々」としての「おたく」カテゴリー

このような報道の中で、かつて中森の「おたく」を批判した大塚はMと同世代の人間として記事を寄せている（『週刊読売』1989.9.10. pp24-26）。そこで、大塚は中森の「おたく」カテゴリーとも、M事件の報道における「オタク族」とも明確に異なるカテゴリーのもと、そのテキストを組織していく。そもそも83年において大塚は「おたく」を「差別用語」として使用することを避けるべきだとしていた（『漫画ブリッコ』1984.6.1.）。その大塚が「おたく」カテゴリーのもとに何を行っているのか。これはM事件の中で中森の「おたく」カテゴリーが犯罪と結び付いた特定の世代を分類するカテゴリーとして拡張されていく文脈の中で理解しうるものとなっている。

Mの犯行と結びついた諸特徴の一つとして「オタク族」が目ざされ、犯罪者予備軍世代として問題視される中、大塚はMの「同世代」として、「ぼくらは同じ尻尾を持っている」という記事を書く。大塚はそのテキストの冒頭でM事件の直後、83年に「けんか別れ」していた中森から電話があったことを述べ、続いて以下のように続けている。

引用⑩（『週刊読売』1989.9.10. pp25）

この事件を聞いたらじっとしていられなくて。中森さんと僕だけでなく、いわば、元おたく少年だった同年代の作家や編集者たちは、M君と同じ尻尾を持つものとして、みんなこの事件に動揺し、頭を抱えているんです。

ここでは「中森さんと僕」さらには多くの同

年代の作家や編集者たちが、Mと同様な「元おたく少年」というカテゴリーのもとに描かれている。前節で見たように、中森の83年のテキストにおいて、中森は自らを「おたく」カテゴリーのもとにテキストを組織してはいなかった。また大塚も当時、自らを「おたく」として明示してはいなかった。中森はあくまで「おたく」を「彼ら」として描き出し、このことに対して大塚は差別的であるとし、打ち切らせていたのだ。にもかかわらず、引用⑩で大塚は「元おたく少年」というカテゴリーを同じ世代、「我々」として用い、そのカテゴリーのもとで「動揺し、頭を抱えている」ことを示している。さらに注目したいのは、大塚は「元おたく少年」であることを「我々」の問題としながら、報道において用いられる「オタク族」カテゴリーのあり方、つまり犯罪との結びつきに対して疑義を示していく点だ。

引用⑩（『週刊読売』1989.9.10. pp26）

では、今田勇子であるぼくらがいて、なぜ彼が犯罪者となり、ぼくはそうでなかったのか。この立場の差はどこで生じたというのか。言うならば、あみだくじを引くときの運、不運の差に過ぎないのではないのでしょうか。

今田勇子とはMが犯行声明で用いた名前である。大塚は同じアニメや漫画を読んできた自らの世代について、「ぼくらの中に今田勇子がいる」と例えた上で、上記の引用を続けている。つまり、「おたく」であることは「ぼくら」に当てはまるものであり、犯罪者になりうることと結びつくものではない。「犯罪者」となりうるかどうかは「運、不運の差」に過ぎないのだと主張している。このようなテキストの組織の中で、大塚は「おたく」カテゴリーを「犯罪者

予備軍」の「世代」としてではなく、「ぼくら」のカテゴリーとして使用していく。そうすることでM事件における「オタク族」カテゴリーの使用に基づく「オタク族」への批判への疑義を示している。ここで83年に中森によって示された「異様な少年少女」に適用されていた「おたく」カテゴリーは、「ぼくら」を指すカテゴリーとして使用されている。そして、そのカテゴリーの用法の変化は、M事件における「オタク族」批判という文脈への大塚なりの態度表明の中で起こっていたのである。さらに、大塚はこのテキストの中で「おたく」の問題を「消費社会」の問題として、その内容を拡張していく。

引用⑪（『週刊読売』1989.9.10. pp26）

今、感じていることは、「おしゃれ」なものを追い、おたくとは対極に位置していると思っている人たちも、案外イコールなのではないかということです。

例えば、各国の無数の食器を特集している女性誌がある。無数のアニメだと「おたく」で、お皿だと「おしゃれ」なんでしょうか。本当は、全部「いらない」もので、無意味なコレクションです。この消費社会に生きるものがM君に関して今、何を言っても、それがやがて自分たちに返ってくるような気がしています。

大塚はこのテキストの最後で、「おたく」の対極にある人達も「案外イコールなのでは」ないかと主張している。そこで「イコール」になる理由として、「おたく」もそうでない人達も「無意味なコレクション」を集めるような「消費社会」に生きる者であり、同じ「消費社会」に生きる者が同じ者に批判を向けても、自分に返ってくると述べる。

この主張は一見極論に見えるが、このよう

な「おたく」を批判の対象として扱うのではなく、「消費社会」の問題として取り扱うという態度は、後続のM事件の「おたく」批判に対する議論として繰り返し用いられている。半年後に出版された『別冊宝島 おたくの本』においても「おたく」こそはポスト産業社会を読む鍵に違いない。この本はそういう視点のもとに、「おたく」の記号生産と消費の現場に直接切り込んだ日本で初めての試みである」（宝島1989）といった宣言のもと、様々な切り口から「おたく」について論じられている。

大塚の記事自体が、このような「おたく」カテゴリーのもとに「消費社会」を論じる可能性を直接的に切り開いたものだという主張するものではない。しかし、M事件の報道における「オタク族」と犯罪との結びつきに対して大塚が示した「おたく」カテゴリーのもとに組織されたテキストは、大塚らをMと同じ「おたく」カテゴリーのもとに置き、読者である人びとに対し、この問題が消費社会に生きる我々すべての問題であることを主張する。この時、「おたく」カテゴリーは批判対象ではなく、「我々」が引き受けるべき消費社会の問題の一つとして用いられ、そこで「おたく」をめぐる議論に関する新しい活動の可能性は開き、実際にM事件の報道における「オタク族」批判への疑義を可能にしているのだ。そして、このような「おたく」カテゴリーの変化の中で後に展開されるような、「おたく」へのポジティブな議論、消費社会論としての「おたく」論は展開されるようになっていったのである。

6 結語

本論は、「おたく」カテゴリー登場以前のファン雑誌における投稿ハガキ（3節）、「おたく」

カテゴリーの登場としての中森のテキスト（4節）、そして「おたく」カテゴリーが広く知られることになった契機であるM事件報道（5節）を対象に、それぞれのテキストが如何なるカテゴリーのもとで組織され、その記述の中でカテゴリーそのものが如何なる変化をしてきたのかを見てきた。「おたく」カテゴリー登場以前、ファン雑誌では、まさに「ファン」であることをめぐって当時ネガティブな意味を持った分類として新聞などで見られた「ロリコン」などのカテゴリーが自らの嗜好を指す分類として用いられ、その使用を通してより細分化されたファン活動が可能になっていた（3節）。このような「読者」であり「ファン」であることが期待される雑誌において、その「読者」をその嗜好だけでなく活動においても異様な他者とするカテゴリーとして「おたく」カテゴリーは登場し、読者にはネガティブなある種の差別用語として理解され、読者自身を記述する際に適用されるものではなかった（4節）。このような「おたく」カテゴリーが広く、週刊誌や新聞においても使用されるようになったのは、89年のM事件の報道だった。そこで「おたく」カテゴリーは、「ペドフィリア」などのカテゴリーと共にMの犯行の特異性を説明するために用いられ、異常な犯罪を起こす可能性のある世代を分類するものとして用いられるようになっていく。そこで83年の「オタク族」カテゴリーは拡張され、犯罪と結びつくもの、あるいは親が管理すべき子どもの異常性として批判されていった。そのような文脈の中、かつて「おたく」を差別用語として批判していた大塚は「おたく」を「我々の世代」を指すカテゴリーとして用いはじめる。それは、M事件における「おたく」と犯罪の結びつきへの疑義であり、そのテキストの中で大塚は「おたく」を消費社会と

結びついた現象として表現し、その分類の基準を拡張していった。このテキスト自体はその後に言及されることは少ない。しかしながら、後に見られる「おたく」についての語り、現代社会、消費社会の問題として、その可能性を模索するという立場は、M事件の報道における「オタク族」カテゴリーの使用という背景において有意になるテキスト実践の中で生み出されたことがわかる。

これは、「おたく」というカテゴリーの登場、そしてその使用をめぐる人びとの活動の中での「おたく」カテゴリー自体の変化の記述であった。このような記述は、「おたく」であることの可能性の変容を示し、私たちが、今、「おたく」という人びとを問題とすることの基盤をなす「おたく」カテゴリーのあり方の一端を明らかにするものだ。

今回論じた80年代を対象とした「おたく」カテゴリーをめぐる人びとの活動以降、「おたく」カテゴリーを自らに適用する人びとがメディアに登場するようになり、さらなる「おたく」カテゴリーの変化を伴いながら、「おたく」カテゴリーのもとになされる活動の可能性の幅は変化していく。そこで如何なるカテゴリーと人びとの相互作用のもとに、後に「分化する」〈オタク〉(松谷2008)、「能動的なオタク」(村瀬2003:139)と評され、多くの人が自らを「オタク」だというような活動⁷が展開されていくのかは、今後の課題としたい。

文献

- Hacking, I., 1995, *Rewriting the soul*, Princeton University Press. (= 1998, 北沢格訳『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』早川書房.)
- , 2002, *Historical Ontology*, Harvard University Press. (= 2012, 出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳『知の歴史学』岩波書店.)

注

¹ 引用などでない限り「コミケット」、「コミックマーケット」等は「コミケ」と表記した。

² 例外的に、『ファンロード』(1982.1.25. pp20)において、新井素子が用語解説コーナーにおいて「あたし 多用される一人称代名詞 「おたく」の逆」という解説を行っている。だが、4節で見るように、中森の「おたく」カテゴリーは、新井の使用する「おたく」とは言葉は同じでも概念としては大きく異なっている。本論はこのような点からも、語の有無や初出ではなく、そのカテゴリーの使用や意味に注目していく。

³ 『月刊アウト』(1977.9.10 から 1990.3.01)と『ファンロード』(1980.10.25 から 1990.12.01)を対象とした。

⁴ 同様なカテゴリーの下での推論は、『週刊現代』(1989.9.2. pp30)においても見られる。

⁵ 「ホラー関係者緊急座談会 ロリコンのほうがよっぽど危ない」(『週刊朝日』1989.9.1. pp26.)「彼の妄想はここ(※自室)で虚構から現実へと這い出していった」(『サンデー毎日』1989.9.3. pp33 ※筆者注)

⁶ 同様な「精神医療関係者」によるチェック表が『週刊読売』(1989.9.10. pp29)にもある。

⁷ 2010年12月に行った練馬区在住の18歳から20歳を対象としたアンケート調査(北田ほか2013)では、「自分はオタクである」というカテゴリーの自認についての質問に対し、44.2%の回答者が「そう思う」か「ややそう思う」と回答している。

- 七邊信重, 2005, 「文化を生み出す『集団』——オタク現象の集団論的分析から」『現代社会理論研究』15: 394-405.
- 金田淳子, 2007, 「マンガ同人誌——解釈共同体のポリティクス」佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣.
- 北田暁大・新藤雄介・工藤雅人・岡澤康浩・團康晃・寺地幹人・小川豊武, 2013, 「若者のサブカルチャー実践とコミュニケーション——2010年練馬区「若者文化とコミュニケーションについてのアンケート」調査」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』29: 105-53.
- コミックマーケット準備会, 2005, 『コミックマーケット30's ファイル——1975 - 2005』青林工藝社.
- 前田泰樹, 2009, 「遺伝学的知識と病いの語り——メンバーシップ・カテゴリー化の実践」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版.
- 松谷創一郎, 2008, 「〈おたく問題〉の四半世紀」羽渕一代編『どこか〈問題化〉される若者たち』恒星社厚生閣.
- 宮台真司, [1994] 2006, 『制服少女たちの選択——After 10 Years』朝日文庫.
- 宮崎あゆみ, 1998, 「ジェンダー・サブカルチャー——研究者の枠組みから生徒の視点へ」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー——学校現場のいま』嵯峨野書院.
- 村瀬ひろみ, 2003, 「オタクというオーディエンス」小林直毅・毛利嘉孝編『テレビはどうみられてきたのか——テレビ・オーディエンスのいる風景』せりか書房.
- 中森明夫, 1989, 「僕が「おたく」の名付け親になった事情」『別冊宝島104 おたくの本』宝島社.
- 大塚英志, 2004, 『「おたく」の精神史——一九八〇年代論』講談社.
- Sacks, H., 1974, "An analysis of the course of a joke's telling in conversation," R. Bauman and J. Sherzer eds., *Explorations in the Ethnography of Speaking*, Cambridge, UK; New York, NY: Cambridge University Press.
- , 1984, "On doing "being ordinary"," J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 413-29.
- , 1979, "Hotrodder: A Revolutionary Category," G. Psathas eds., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publisher. (= 1987 山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳「ホットロッダー——革命的カテゴリー」『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』せりか書房.)
- 鶴田幸恵, 2008, 「正当な当事者とは誰か——『性同一性障害』であるための基準」『社会学評論』59(1): 133-50.
- 浦野茂, 2008, 「社会学の課題としての概念分析——「構築主義批判・以後」によせて」『三田社会学』13, 47-59.
- , 2009, 「類型から集団へ——人種をめぐる社会と科学」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版.
- Winch, Peter, 1966, *The IDEA of a Social Science*. (= 1977, 森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社.)
- 米沢嘉博, 2010, 『戦後エロマンガ史』青林工藝社.

(だん やすあき、東京大学大学院学際情報学府博士課程、pakuti@gmail.com)

(査読者、金田淳子、鶴田幸恵)

Conceptual analysis of otaku:

Focusing on the early usage of the word otaku in magazines targeted at fandom

DAN, Yasuaki

The term otaku has been known to categorize a certain group of people ever since it was coined in the 80s. This paper does not aim to explain the historical transformation of a tribe known as otaku, but describes how the category of otaku opens up possibilities for human action, and how human activities affect the category of otaku.

Therefore, I have analyzed some articles and letters that appeared in Fanzines before the appearance of otaku categories (3) and columns written by Nakamori (4), and the news report on “M” crime, which is known as a catalyst for otaku category (5).

My analysis indicates that readers initially perceived the category of otaku, used in articles written by Nakamori, as having a negative meaning. However, this has subsequently changed to acquire a positive meaning. This change in the perceived meaning of the category has opened up new possibilities for researching otaku with reference to other aspects of consumer society.